

■明けましておめでとうございます



本年は亥（いのしし）年です。干支（えと）でいえば己亥（つちのとい）の年になると記してありました。皆さんにとってよい1年となりますようにお祈りします。

■研修会の御案内

すでに町報でも御案内のことですが、史談会の研修会を下記の日程で開催します。皆さんの御参加をお待ちします。

今回の研修テーマは「荒砥町のにぎわいを振り返る」というものです。

荒砥の町は、近世期から最上への街道筋とし

て、また最上川舟運の船着き場として商業の発達した土地でした。また、明治末期から大正初期にかけて、養蚕のための桑市が開かれた町として賑わいました。

『白鷹町史』の下巻には桑市に来る桑の仲買人（桑サンベ）が、料理屋などのよい客種であったことが記載され、

丸金のオサワ見るとて 橋から落ちた
オサワ見ないで因果見た
親の意見を俵につめて
東町通いの道ぶしん
という俚謡も引用されています。



五階建ての下丸金

筆者の場合、このようなことは断片的な話に聞くだけであって、あちらこちらつながることが多くあります。たとえば現在の出来町の一部は「東町（あづまちょう）」と呼ばれていますが、それは「吾妻町」の意味だそうです。それがどのようないわれなのかも今回聞くことができるのではないかと楽しみにしています。

●いつ 2月16日（土）

・研修会 午後1時30分～2時40分

「荒砥町のにぎわいを振り返る」

佐藤京一さん パートⅠ

江口儀雄さん パートⅡ

・懇親会

かつて料理屋で出された「鯉濃（こいこく）」が出される予定です。

会費は会員が1,000円、非会員が1,500円

●どこで

荒砥地区コミュニティセンター

●参加申し込み

2月8日(金)まで

教育委員会生涯学習・文化振興係へ

電話 85-6146

■ 『荒砥町史』 拾い読み(2)

守谷英一

「ポーっと生きてんじゃねーよ!」とチョコちゃんに叱られそうな毎日を過ごしています。それでこのシリーズを忘れていました。3号ほど間が空いて2回目ということです。今回は「荒砥と俳諧」ということで記してみます。

『荒砥町史』では476ページから478ページに「荒砥と俳諧」と題して「概説」を述べています。取り上げられているのは遅日庵衛足(大貫吉左衛門 杜哉ともいう)、半青居新甫(衣袋彦次)、常々庵先旨(旨という表記もある 加藤三之丞)、木枯庵櫻風(ていふう 長岡不二雄)、芳賀芳州(芳賀忠助)などが取り上げられています。

このうち、遅日庵衛足、半青居新甫、常々庵先旨、木枯庵櫻風については、487ページから493ページまで小伝がついていて、ある程度の経歴や業績がわかるようになっています。

この『荒砥町史』に書かれた俳人の他にも、紺野川丈という人がいて、会員の江口儀雄さんは、川丈が山寺立石寺の境内に嘉永6(1853)年に建立された芭蕉の「閑かさや岩にしみ入蟬の声」の句碑の側面に「花さかぬ草木から風薫りけり」という句を残していることを発見しています。

江口さんに伺ったことを記しておきます。

紺野川丈は、長井小出の商人川崎次郎右衛門蘆州の三男で、荒砥の紺野有兎家の5代目を嗣いだ紺野源兵衛のことです。紺野有兎は荒砥仲

町にあった紺野家の2代目で、前で述べた遅日庵衛足の友人であり、句友でもありました。また、川崎次郎右衛門家は遅日庵衛足の妻の家でもあります。

川丈がなぜ芭蕉の句碑に自作を刻むこととなったのかについては、後日江口さんに詳しく語っていただきたいと思いますが、その墓が荒砥新町の金鐘寺境内に残されていることも江口さんから聞きました。



撮影 江口儀雄

このようなものが埋もれているのだということを知って改めた次第です。

雪の季節となり、朝のぶらぶら散歩も滞りがちになっています。この冬ごもりの間に、丁寧に『荒砥町史』を読み込んで、自分なりに少しテーマをため込んで春をまとうかと考えている今日この頃です。

■ 『史談』 29号の編集

今年度は『史談』の発行年ということで編集作業が丸川会長、江口さんの手で着々と進んでいます。楽しみにお待ちください。